わたしにつながっていなければ

奨励	近藤 十郎〔こんどう・じゅうろう〕
奨励者紹介	日本キリスト教団城陽教会牧師

「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。わたしにつながっていながら、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる。しかし、実を結ぶものはみな、いよいよ豊かに実を結ぶように手入れをなさる。わたしの話した言葉によって、あなたがたは既に清くなっている。わたしにつながっていなさい。わたしもあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が、木につながっていなければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながっていなければ、実を結ぶことができない。わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。」

（ヨハネによる福音書　一五章一―五節）

長昆布のこと

皆さんは長昆布をご存じでしょうか。長昆布というのは大量に生産できるということもあって、値段も庶民的で、手に入れやすい昆布です。九月の終わりぐらいまでが収穫期で、産地は主に北海道の根室・釧路地方の太平洋沿岸です。長昆布は、長さ一〇メートルから最大二〇メートル、平均一五メートルぐらいになるそうです。この昆布は、収穫に二年かかります。最初の一年目はそれほど大きくはならずに、一年過ぎるころに葉の部分が枯れてしまう。しかし、根元から枯れてしまうわけではなく、二年目に再び生長を始めて大きくなり、収穫のできる長昆布になります。

昆布は、胞子によって増えていきます。遊走子といわれる二本の鞭毛をもつ胞子が、海中を泳ぎ、岩礁などに着生（ちゃくせい）します。着いて生きるという意味です。着生した遊走子が発芽して、個々に雄と雌の配偶体となり、受精し、胞子体として生長したものが昆布です。一年目はある程度の大きさになって葉が枯れますが、根元が残って、次の本物の昆布をつくる土台になるというわけです。

海で荒波に揺られる昆布の葉は、テレビで見ても迫力があります。長さが一五メートル、幅が二〇センチぐらいの昆布が揺らぐ勢いはすごいです。しっかり岩にくっついていないと波で剥がれ落ちて生長しない。波に堪えることができる昆布だけが生長していく。この様子をテレビで見て、我々人間の生き方の大きなヒントがここにあるのではないかと思いました。未来も含め、人生の着生の場所を模索することができなければ、本物の人間にはなることができない。着生する恰好な岩礁にたどり着き、どんなに荒波に揺られてもそこにしっかり根を張って離れず生長した立派な長昆布の様子を見て、教えられた気がします。皆さんに対する問いかけというよりも、私自身の生き方に深くかかわっているように思いました。

どんなに羽ばたいて成功して、繁盛し、将来が約束されるように見えていても、人生成功組、勝ち組に入ったと思われるような経験があったとしても、根元がしっかりしていなければ荒波に堪えることはできないということです。「人間力」というハイカラな言葉も出てきているくらいだから、人生の源をどこに求めるかというのを提案させていただくために「着生力」という言葉があっても満更、間違いではないと思うのです。ここからは、本日の聖書箇所に重ねてお話ししていきたいと思います。

「わたしにつながっていなければ」

「わたしにつながっていなければ、実を結ぶことができない」。なぜこういう言葉をイエスはおっしゃったのでしょうか。わたしにつながっていなければ、ただ浮遊するだけであって、それはいつか流れ去り、そして朽ち果てるようなものだ。反対に、「人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ」。聖書の御言葉で、イエスはこのように我々に約束してくれています。着生する場所を見極め、それを発展させることができれば、どんなに人生が荒波に翻弄されることがあっても、豊かな実りをもつことができるという約束です。

彼の言葉を聞いた直接の対象は弟子たちです。もちろん村の人たちも一緒に聞いていたかもしれませんが、弟子たちが、まもなくイエスをこの世から送り出さなければならない。そういう緊迫した場面です。ヨハネによる福音書一二章、一三章あたりから、このイエスの最後の十字架への歩みが予告されています。このぶどうの木とその枝の話も、弟子たちに対する一つの遺言の言葉のように思われます。弟子たちの足を洗ったり、自分の頭に香油を注いでもらったり、わたしの葬りの備えのためだということをおっしゃったり、一連の聖書の物語を読むと、これは弟子たちへの遺言であることが分かります。自分の地上での生涯が終わり、姿が見えなくなったときに、弟子たちがどういう状態におかれるかということを、イエスはご存じだったのです。死後、きっと弟子たちは、自分の生き方の指針を見失って取り乱し右往左往するだろう。これだ、あれだと自分の生き方を勝手に模索して、権力に走るものもいれば、信仰を見失うものもあるだろうということを見通していたからこそ「わたしにつながっていなさい」ということを、あえて遺言として残されたのではないかと思います。

着生する場所を見つけ出すどころか、探そうともしない浮遊状態で人生を生きていくという生き方。我々のほとんどすべては、そのような生き方をたどるかもしれません。それは混沌と闇の世界です。何が善であって、何が悪であるか。何が正義であって、何が不正義であるかということが分からない、そういう現代の混沌とした状態というものは、人類の歴史のはじめから我々を苦しめている最大の問題です。

「どこにいるのか」という問いかけ

今日は秋学期のチャペル・アワーで、どんなメッセージを語らせていただけばよいのかな、と祈りながら考えました。先生方からお知らせいただきました秋学期の統一テーマは、「あなたはどこにいるのか」という言葉です。創世記三章の言葉です。人間であるアダムとイブが、食べてはならない禁断の木の実を食べ、エデンから追放されて、園の茂みのなかに隠れているときに、神様が呼びかけられた言葉です。

新共同訳聖書では「どこにいるのか」と翻訳しています。以前の口語訳聖書では「あなたは、どこにいるのか」と訳されています。私は、「あなたは」という人称代名詞はあった方がよいと思います。旧約聖書の作者に言わせれば、神様と関係なくても自力で生きていけるという、一つの錯覚が人間の傲慢にほかならないということだと思います。「どこにいるのか」「あなたは、どこにいるのか」、と神様は隠れた彼らに声をかけられました。その声はどういう響きだったのでしょうか。隠れた人間、自立していけると錯覚した人間を厳しく咎めて「どこにいるのか」と言われたのか、あるいは自立して自由に生きていけるかのように錯覚した人間を憐れみ、「あなたは、わたしと離れて、わたしと切り離されて本当に生きていくことができるのですか」という、ニュアンスで声をかけられたのでしょうか。両面あると思いますが、私は後者の方ではないかなと、考えています。

神様が人間を切り離す決断をされたならば、探しにきてくれるはずがない。勝手に飛び出して犯してはならない罪を犯し自立できたかのように、ふるまっている。今、流行りの自己責任の問題だから、「もう、わしゃ知らん」、というふうに神様が思われたならば、彼はわざわざ、自分のもとを離れて、自分を見捨てて去っていった人間を探しにいくはずがない。きっと探したのでしょう。どこに隠れているかも、はじめから分かっておられたかもしれません。「どこにいるのか、本当にあなたは、わたしと離れて生きることができるのですか」と語りかける、私はそこに神の赦しと愛を読み取ることができると思います。本当に人間がだめだと思って断罪してしまったら、探しにいく必要もなかったはずです。あえて探し、声をかけ、人間が神の創造物として造られたという原点に立ち戻ってほしいと、彼は期待したのだろうと思うのです。

我々現代の社会も含めて、人間の精神文化史を繙（ひもと）けば、いかにして人間が宗教の呪縛から逃れ、自立していくかということが中心にありました。神から離れることで、我々にはある種の快感が得られます。人間は技術を生み出し、権力の格差社会を生み出す、自分の欲望を実現させる、そのことによって抑圧されたものや、差別されたものや、社会から切り離されてしまう人びとは自己責任だとして切り離して考えていく文化をつくりだしました。宗教から束縛されない自立した人間は、一見恰好は良いかもしれません。しかし人間の心の文化、精神の文化史がもたらした現実は、我々がよく知っている通りです。人間は孤独です。競争社会に負けないように負け組にならないで勝ち組になりたいという欲望をお互いにぶつけあうことによって、負けたのは努力が足りない自分が悪い、そういうふうに断罪していくのが人間の文化でした。

私たちの居場所はどこに？

孤独、疎外、この問題をどういうふうに解決していくか、これが我々現代人に課せられた最大のテーマです。私たちに居場所があるか、お年寄りたちに居場所があるかと問わなければならない私たちの現実の社会です。歳を取ったら厄介者になるのではないか。年金の不正受給をする人びともいる。歳を取った自分の母親の世話をしている人もいます。彼はこの不況のために職を失って、お母さんの年金が生活の頼りです。結婚して奥さんも子どももいます。でもこの歳になったら就職する先もない。頼りにする経済はお母さんの年金しかない。「おふくろ、早く死なないでくれよな」。どんな悲しい状況が、そこにあるかということを思わされて胸が詰まります。死なないでほしい。何のためか、年金のためです。母親に死なれたら年金が止まる。だから年金の不正受給というものも実際は起きてくるのですね。一〇〇歳以上の高齢者で生死不明の戸籍だけの人の数は数十万人単位です。どうしてそういうことが起きてくるのでしょうか。

自分の居場所がない、誰も探してくれない。消息不明になり、どこで何をしているのか、生きているのか、生きていないのかさえ分からない。人間の社会には、近代国家には、そういう悲しい現実があります。自分の居場所を、どこに見いだそうとするのか、それは我々年配の者たちにしても、皆さんのような若者たちにとっても、日々の学びのなかで、最大限に努力して、それを探し出されなければいけないと思います。私は同志社女子大学にかかわっていますが、二回生くらいになると就活が始まります。極端な場合は一回生から四回生で卒業するまで、ずっと就職できるかどうか、親も学生たちも悩みます。それが現実です。大学も何とかして学生たちの就職率を上げたいということで、キャリアサポートセンターを設置して就職技術の訓練を行ったりして支援しています。

役に立たない学問を

学問の世界はいつのまにか置き去りにされて、就職をいかに成功させるか、就活はしんどいから婚活にしようとか、極端な場合もあるようです。私たちの学生時代はのんびりしていました。就職をどうしようと考える必要もなかったし、大学の先生方は「君たちがやっている学問は役にたたない学問というところがミソなんだ」と、よく言われたものです。役に立たない学問をしなさい。学生時代に産官学連携なんて言葉が使われることは、先生も学生も、あまり好きではありませんでした。このごろはどの大学でも産官学連携です。会社を経営している人をお呼びして就職のことを話してもらうとか、実際に社会に出ていったとき、どのような仕事を選ぶとか、大学と連携して産業社会を活発にさせようという工夫がされています。どこの大学でも大差はないと思います。

でも我々がなさなければならないことは何でしょうか。我々が課題として確かめなければならないことは何でしょうか。特に大学生の時代、十八から二十二歳、院を含めればそれ以上さらに数年の学問の生活のなかで自分の着生の場所を、どこにおくか、自分の心の視点を、どこにセットするか、という課題が問われてきます。「あなたはどこにいるのか」という神様からの問い掛けに「ここにいます、はい、私はここにいます」と言えるように、自分の生き方の視点を定めていく。そういうことが私たちに期待されているのではないかと思うのです。

「人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ」と、イエスは約束されました。弟子たちが戸惑わないためでした。むしろイエスがこの地上の生涯を終えて姿が見えなくなったときにこそ、自分のつながるべき道というものが大切にされる、そのような生き方を模索していきなさいと、ある種の遺言としてイエスは弟子たちに語られたのではないでしょうか。

皆さんのこれからの学びが充実した意味のある学びになるように、心からのエールをおくります。混沌とした現代の社会のなかで、もう一度自分の「着生力」を見直すことが求められています。私自身もそのことを確認しながら、生きていきたいものだと思っています。

二〇一〇年九月二十九日　京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録